

# 学園ニュース

富山大学

NO. 64

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

平成元年 6 月 30 日



学内風景（その28）人文学部語学文学科校舎 教育学部 安田 郁子

## 目 次

新入生諸君へ .....	教養部長 大谷 重彦 .....	2
就任挨拶 .....	教育学部長 山地 啓司 .....	3
新任教官紹介及び挨拶 .....		4
ミシガン湖畔の思い出 .....	工学部助教授 五嶋 孝仁 .....	17
ヒトの基本的運動の定量解析 .....	教育学部講師 堀田 朋基 .....	20
Impression of Japan .....	外国人留学生（工学部） PEREZ ALVAREZ LUIS EDUARDO .....	21
学生部・保健管理センターだより .....		23

# 新 入 生 諸 君 へ

教養部長 大谷重彦



4月入学当初は確かに「新入生」であった諸君も、この稿を読む頃は既に3ヶ月近い大学生活を経験し、大学祭という一種の元服式も済ませ、もはや「新入生」と呼ばれることに抵抗を覚えるかもしれない。と同時に、この3ヶ月の経験によって、大学生活の

何であるかを既に知ってしまったかのような錯覚に陥っている人もあるかもしれない。そこまでは到らぬまでも、諸君の各自が、入学当初の自分とひき比べて、なにがしかの感慨—満足・喜び・希望・不平・危惧・落膽等等—を抱いているに違いない。そういう現時点の諸君に対して、私は語りかけたいと思う。

「(略)……ここで更に一言新入生諸君の注意を促しておきたいことがあります。それは、社会に対して諸君が有する責任を自覚してほしい、ということであり、と言っても、これは諸君が将来において社会に有為の人となるべき責任のことではありません。現在、今、諸君が富山大学の学生となった瞬間に、社会に対して生じた責任のことを言っているのです。そしてその社会とは、具体的には、諸君が富山大学に入学を許可されたがために、同じく富山大学を受験しながら入学できなくなってしまった多くの人達の存在を意味しています。競争試験というものの性質上やむを得ぬこととは言いながら、諸君の一人一人が、他の幾人かの富山大学志望者を排除して、今この場に出席しているのだ、ということをおぼろげに頂きたいということです。近年残念ながら大学を中途退学していく学生の数が少なくありません。それには、入学後に自己の適性に目覚めた、というケースもありましょう。また家庭環境の変化等によるやむを得ない場合もあるでしょう。しかし、もしそれがほんの一時の障害や、迷いや、克己心の不足、他人への甘え、怠け心、などによる学業の放棄である場合は、諸君が排除した富山大学受験生に対して、諸君はどのように申し開きをするのでしょうか。この意味で、諸君は今、社会との間に一種の厳粛な関係を結んだのだ、ということをおぼろげに頂きたいのであります……(略)」

上記は去る4月10日入学式後の教養部オリエンテーションで私が述べた「あいさつ」の原稿の一節である。覚えていてくれる人もあろうけれども、目まぐるしいテンポで動く生活の中で昨日の言葉も忘れられがちであることを思えば、敢て再録することも無駄ではなからうと考える。

もちろん、社会との間のこうした「一種の厳粛な関係」の意識を、人は常に持ち続けることは困難である。また、自分が現在占めている立場は幾人かの他人によって渴望されている立場である、という意識をあまりに強く持つならば、却って自己を萎縮させる怖れもある。選抜試験は必然的に及第者と落第者とを生じさせる。光がさせば影が生じるのは仕方がない、と観念するのひとつの態度であろう。しかし、社会の影の部分に対して眼をつぶることはできても、その存在を意識した以上は、その意識から逃れることはできない。まして諸君は若人である。若人らしい正義感を持っているはずである。正義感とは正しいことが行われることに対する責任感にほかならない。およそ大学生活を内側から支えるものは先ず旺盛な知的好奇心であるはずであるが、仮に一時的にその知的エネルギーが衰退することがあるとしても、なおかつ諸君をして勉学の道を歩ませる原動力のひとつとして、諸君の責任感に期待したのである。

ところで、そもそも大学生活が諸君の人生の上にも有する意義は何であろうか—?

まだ大学生活を始めたばかりの諸君には、この問いに経験的に答えることはできない。だが将来の人生のある時期において、諸君はこの問いに答えることができなくてはならない。諸君と同じ多くの若人が寝食を得るために働いている間に、諸君は4年間何をしてきたのかを真剣に答えねばならない時があるであろう。その時、諸君は、それは単に専門的知識と技術を身につけるためだけではなく、より高度な社会的責任を自覚するための修業期間であった、と答えることもできるはずである。特に、一年半の教養部生活は、諸君の人生のうちで最も寝食と直結しない、それ故人間として又と得難い一時期であろう。この時期に諸君が修得するものか、社会が大学生に期待しているものかなのである。近年大学の一般教育をめぐって種々

の論議がなされているが、ある報告書の中に引用されていた次の言葉はこの点で極めて示唆的である。

「一般教育とは社会がその成員に求める要求の制度

的確認である」。

かなり難解な日本語ではあるが、その意味する所を諸君と共に深思したいと思う。

## 就 任 挨 拶

教育学部長 山 地 啓 司



誰一人知人がいないことが、私を富山に転勤させる大きな理由であった。私にとって富山は真に新天地であった。最初に富山大学を訪れたのは昭和50年3月の小雨降る肌寒い日であった。正門を入れて体育棟に行く途中で気付いたことは富山大学がコンパクトに

まとまった小ぎれいな大学である、ということであった。なかでも特に印象に残った光景は学館前にある異様な像である。ロダンの「考える人」、ミレーの「落ち穂拾い」と「種を蒔く農夫」の3つの作品を一緒にした無神経さと不合理さに名状し難い滑稽さを感じた。と同時に、その武骨さに親しみも覚えた。

それから今年で15回目の春を迎えた。その間、内外の多くの先生方の御援助や御協力を得て研究ができる環境条件が整った。それはまた“どこでもやる気になれば何でもできるのだ”という自負心を育てた。これまで多くの大学から誘いを受けたが、その度にここでも研究は十分できる、という意地をバネにしてその実証に努めた。これまでに著編書は20冊に達し、論文は100編を超えた。それは周囲の先生方の時間的、物質的そして精神的な寛容なはからいがあったからに他ならない。要するに、この14年間は諸先生方の好意の上にあぐらをかき、やりたいことをやり、言いたいことを言ってきた我ままな年月だったことになる。

ある日突然、学部長という他人の為に尽くさなければならない立場に立たされた。自分の為にあった世界が他人の為の世界となった。立場が逆転した時、そう簡単に適応できるだろうか、と思ったがいずれにしろ結果はでたのである。私がお引き受けするにあたっての第一声は、「自分の人生の一つの試練としてお引き受けしたい……」という言葉しかなかった。学部長になって、多くの教官や事務官の方々の大きな不安と小

さな期待を背に感じながら、すでに2か月が経過しようとしている。その間、何をしでかすか判らないという不安感と、何をやっているんだという焦躁感とが同情と化したらしく、周囲の方々が色々教えて下さり、細々ながら職務を全うしてきた感がある。

英語で学部長とは“Director”という。指導・監督する立場という意味らしい。よく譬えられるが、指導者には蒸気機関車のように自ら先頭に立ち集団をぐいぐい引っ張ってゆく独裁的タイプを好む人間と、今日の新幹線のように客車一つ一つにモーターが内蔵され、それらを結集して大きな力とする、いわゆる民主的タイプを好む人間とがいる。前者は抜群の能力とカリスマ性の持ち主でなければならない。それに対し、後者は一人一人の個性なり特性を最大限に生かし、その力を一つの方向へ結集するようにまとめる能力を持たなければならない。私には前者は不向きである。となれば、後者が得意かといえそうではない。しかし、二者択一ならば仕方がない、後者である。

教育学部はそれぞれの研究分野なり教育の道のエキスパートの集合体である。その長は、教官一人一人が教育や研究に全力投球できるように周囲の環境を整備すること、あるいは社会のニーズに応える人材を養成する機関として合理的な環境を作り出すことを主眼とすべきである。そのためには、学部構成員が力を結集して大学院設置に向かうか、個々の教科なり関連の教科が新しい課程なりセンターを作り出してゆくかである（既存の課程を維持し、充実を図ろうとすることは時代の流れに逆らい、学部のじり貧状態をただ持つことになり得策とはいえない）。変動する社会のニーズに応え、あるいは時代を先取りすることが、学部を活性化し、拡大化させる道と考える。そのためには、教官一人一人が現状を把握し、将来を見通しながら積極的に改革への道を模索しなければならないであろう。

大東京火災が行った今春社会人になった人々たちへの大学生活に関するアンケートは大学人にとって予想さ

れたとは言えショックな結果であった。「大学で知識や考え方に魅力を感じた先生はいたか」という質問に「いなかった」と答えた者が53.4%、「大学で学んで面白さ、興味深さに目を開いた学科、講座」を尋ねると59.8%が「なかった」と答えている。大学人にはこの結果に対して反論があるかもしれないが、真理も含まれていることを否定できないであろう。ある意味では、大学は学生に教育を提供するサービス機関である。それゆえ、学生に学問やそれに対する考え方、姿勢に魅力を感じさせられなかったなら、サービス機関としては失格である。

国立大学でも最近は大学案内を配ったり、大学説明会を行うことによって、高校からより優れた人材を集め、社会に対して高度な知識と技能を持った人材を送り出す努力が積極的になされるようになってきた。そ

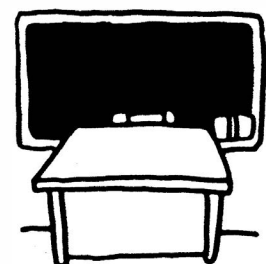
の時、最も大切なことは教官側にそれら人材を引きつける魅力があるか否かである。理論に裏打ちされた説得力と教育・研究への情熱とを持ち合わせているか否かである。

今後、教育学部が大学院なり新課程なりを作る際に必要なのは教官一人一人の資質の向上である。魅力ある授業を展開し、理論なり研究成果を社会に還元する努力が積極的になされない限り、大学院設置はおろか新しい課程は夢と終わるであろう。現在の教育学部に本当に必要なのはアカデミックな雰囲気かもしれない。となると、私の使命はアカデミックな雰囲気作りだろうか。いずれにしろ、教育・研究が尊ばれる学部にしたいものである。それは大学院や新課程への道を一步一歩前進させることになるであろう。

## 新任教官紹介

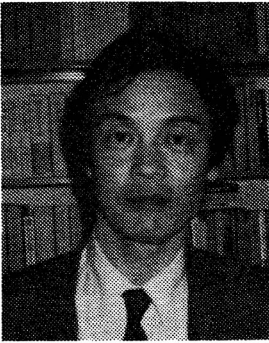
- |                     |  |                    |   |
|---------------------|--|--------------------|---|
| ○小 澤 浩<br>昭46. 3    | 教授（人文学部）元. 4. 1<br>東京教育大学大学院文学<br>研究科修士課程修了<br>担当：文化構造論          | ○河 本 肇<br>昭58. 3   | 講師（教育学部）元. 4. 1<br>広島大学大学院教育学<br>研究科修士課程修了<br>担当：発達心理学                |
| ○末 原 達 郎<br>昭63. 11 | 助教授（人文学部）元. 4. 1<br>京都大学大学院農学研究科<br>博士後期課程修了<br>農学博士<br>担当：文化人類学 | ○前 田 あけみ<br>昭57. 3 | 講師（教育学部）元. 4. 1<br>お茶の水女子大学大学院<br>人間文化研究科博士課程<br>単位修得退学<br>担当：保育内容の研究 |
| ○中 村 雅 之<br>昭62. 3  | 講師（人文学部）元. 4. 1<br>東京都立大学大学院人文<br>科学研究科修士課程修了<br>担当：中国語学         | ○島 十四郎<br>昭29. 3   | 教授（経済学部）元. 4. 1<br>東京大学法学部卒業<br>担当：企業関係法                              |
| ○長 井 真 隆<br>昭26. 3  | 教授（教育学部）元. 4. 1<br>富山大学教育学部第二<br>初等教育科修了<br>担当：理科教育              | ○澤 田 利 夫<br>昭48. 3 | 教授（経済学部）元. 4. 1<br>東北大学大学院教育学<br>研究科修士課程修了<br>担当：経営学                  |
| ○石 井 哲 夫<br>昭56. 3  | 講師（教育学部）元. 4. 1<br>東京学芸大学大学院教育学<br>研究科修士課程修了<br>担当：器楽            | ○田 中 祥 子<br>昭40. 3 | 教授（経済学部）元. 4. 1<br>神戸大学大学院経営学<br>研究科修士課程修了<br>担当：経営学                  |

- 山本直孝 助教授(経済学部)元. 4. 1  
昭33. 3 成城大学経済学部卒業  
担当: 企業関係法
- 山本弘 講師(経済学部)元. 4. 1  
昭56. 3 東京大学法学部卒業  
担当: 民事法
- 中村博之 助手(経済学部)元. 4. 1  
昭62. 3 一橋大学大学院商学研究科  
修士課程修了  
担当: 応用経営
- 古田高士 助手(理学部)元. 4. 1  
昭63. 3 新潟大学大学院理学研究科  
修士課程修了  
担当: 応用解析学及び電子計  
算機論
- 西野精一 助手(工学部)元. 3. 16  
昭62. 10 立命館大学大学院理工学  
研究科博士課程修了  
工学博士  
担当: 動力熱工学
- 土屋隆生 助手(工学部)元. 4. 1  
元. 3 同志社大学大学院工学  
研究科博士課程修了  
工学博士  
担当: 通信工学
- 神垣知夫 教授(教養部)元. 4. 1  
昭25. 3 東北大学理学部卒業  
理学博士  
担当: 物理学
- 井上逸兵 講師(教養部)元. 4. 1  
元. 3 慶應義塾大学大学院文学  
研究科修士課程修了  
担当: 英語
- 上野隆三 講師(教養部)元. 4. 1  
元. 3 京都大学大学院文学研究科  
博士課程中途退学  
担当: 中国語



## 新任の挨拶

人文学部教授 小澤 浩



ボクは子供のころから勉強が嫌いなうえに、両親やその兄弟姉妹たちもみな教師という事で何かと被害を蒙ってきたので、学者センセイなどというものは、一番なりたくない職業の一つでした。それから、こんなことを言うたちまち郷土愛に燃えた方々から

お叱りを受けそうですが、生れ育った富山の風土と人間がどうも好きになれなくて、うまく脱出できたら帰ってくる所ではないと思い定めていました。それが、二つながら成就しなかったわけですから、人生というものは、本当にままならないものだと思います。

入った大学が、ICUというヘンな大学で、これもすぐにいやになったけれど、やめるのも面倒で、授業をサボっては、ジャズメンクラブでベースを弾いていました。ところが、そういうボクを、柄でもない学問などというものに追いやって、すっかり人生を狂わせてくれたのが、あの60年安保闘争というやつです。気

がつけばいつの間にかボクは、あれほど嫌っていた教師に身を落として、あれほど敬遠していた郷里の土を踏んでいました。

そして、富山医科薬科大学の教壇に立つこと13年、こんどは「文化構造論」などというあやしげな看板に魅せられて、ついフラフラと杉谷の山から下りてきてしまった、というのが事のいきさつです。

実のところ、今もってボクは、学問も教師稼業も富山という所も好きではありません。できることなら、すぐにも足を洗って、遠くへ行きたい。が、それが宿命ならば、憎いと思うまでこいつらと付き合っとうらう、というのが今の心境です。それにしても、世が世ならば今ごろボクは、場末のクラブかなんかで、ジャズに陶酔していたかも知れないというのに、カミサマもほんとうにヒト(?)が悪い。

ちなみに、天皇=現人神という問題を見据えて、カミとヒトとのあいだという観点から日本人の宗教意識を考察する、というのがボクの一貫して追いつけてきた研究テーマです。これからも変る気遣いはありません。

## 新任の挨拶

人文学部助教授 末原 達郎



本年4月1日付けをもって、人文学部文化人類学研究室に着任いたしました。

知る人ぞ知る。本学の文化人類学研究室は、アフリカ研究のメッカ(のひとつ)として知られています。すくなくとも、文化人類学者であれば、だれもがそう思っているでしょ

う。このメッカに、巡礼はおろか、着任となりまして、喜びもひとしおです。

さて、私もまた、文化人類学の研究者ではありますが、アフリカに魅惑され、アフリカ研究を志したひとりです。というよりは、むしろ、アフリカの毒にあたって、生き方が変わってしまったひとりです。

もともと、京都の町中で育ち、異境への思いをたちがたく、学生時代からずっと脱出を試みていましたが、本格的に脱出できたのは、大学院の博士課程に入ってからです。最初のフィールドが、アフリカのどまんなか、ザイール共和国(旧ベルギー領コンゴ)のマウンテン・フォレストの小さな村でした。当時27才の私は、この村の老人達から、人間の生き方の手ほどきを受けました。どのように、人と接すればいいのか、男と女とはどうちがうか、一人前の人間とはどういうことか、森の中で生きていくにはどうすればいいのか、などなど。毎日毎日、山を登り、下り、木を切り、畑を耕す。単調なようですが、毎日苦しいことと楽しいこととが、交互にやってきます。人間の死にも、頻繁に出会わざるをえませんでした。やがて、研究の対象もアフリカの食糧生産と社会的連帯の研究へと移って

いきました。

以来、一年おきにアフリカを訪れ、滞在期間も通算で3年程になろうとしています。したがって、一見ごく普通の研究者ですが、その根底には、アフリカ的思考と行動とが、どうしてもぬけません。腰をふりながら、ゆったりと歩く歩き方は、アフリカの友人に言わ

せると、まさにザイール人ということになりますし、もし、それに、タムタムの音楽カリンガラ・ミュージックが聞こえてくれば、それがゆらゆらと動き出すのを止めることはできません。はるか、立山の山なみを眺めつつ、その彼方にアフリカをにらんでいる今日のごろです。

## 新任の挨拶

人文学部講師 中村 雅之



今年度より、人文学部語学文学科（中国語中国文学コース）の講師として勤務することになりました。どうぞよろしくお願いたします。

私の専門は「音韻学」と称する分野です。これは「中国語史」あるいは「中国語音韻史」というようなものとお考

えただいて差し支えありませんが、ヨーロッパの言葉における「音韻史」とはいささか趣を異にしております。ご存じのとおり、中国語という言語は漢字によって書き記されてきました。したがってアルファベットのように高度な表音性をそこに期待することはできません。そこで中国語の音韻史を組み立てる場合には様々な「小道具」が必要となります。例えば、各時代の韻書（詩の押韻の規範を定めた発音辞典）や韻図（日本の五十音図にあたるもの）は非常に重要な小道具になりますし、ほかに現代諸方言や日本、朝鮮、ベトナム

等に伝わった外国漢字音、あるいは漢訳仏典などに見られる固有名詞の音訳なども有効です。ところが、こういう小道具があまりに多すぎるせいでしょうか、「音韻学」は最近の学生には最も敬遠されやすい分野となっています。

「音韻学」はもともと「文字学」「訓詁学」とともに、個々の漢字の正確な意味を追求するために発達した学問です。漢字には「形・音・義」という三要素がありますが、それぞれに対応して「文字」「音韻」「訓詁」の学が存在したわけです。しかし、今世紀初頭以来、ヨーロッパにおける比較言語学の成果を取り入れた「音韻学」は、単なる漢字研究の学から、「中国語史」をも含む学問として急速に様変わりしました。それゆえ、「音韻学」は中国の伝統的な学問であると同時に、西欧的な学問でもあります。

今は学生に敬遠されることの多い孤独な学問ですが、きっといつの日か「音韻学をやるために中国語中国文学コースに来ました」という学生が現れることを願って、日々精進を重ねております。

## 新任のご挨拶

教育学部教授 長井 真隆



この4月から教育学部でお世話になっています。これまで富山市科学文化センターで、科学博物館の仕事をしてきました。おもな仕事は、資料の収集、調査・研究、展示、普及教育などで、大学と共通し

た一面があるものの、大学は私にとりまして新しい世界です。皆様のご指導を心からお願いするものです。

教育学部、当初師範学校に入学したのは、戦後まもない昭和23年、新教育制度が施行された過渡期のことです。学校は現在地でしたが、校舎は空襲から免れた旧連隊本部などがあてられ、今の人文学部あたりにありました。講義室は大学本部のところに、また、附属

小学校は連隊の厩舎を改造したもので、情報処理センターのところにありました。そのほか2、3の建物がありました。あとは広いグラウンドと芝草地で、池もありました。池にはクサガメや、ウシガエルがすみつき、ウシガエルの牛のような鳴き声のとどろくなど、のどかな環境でした。

しかし、一步外へでると、富山大空襲の爪跡がちまたに残り、例えば焼失を免れた県庁や、電気ビル、大和などが、バラック越しに一際高く見えたものです。また、街では庭で野菜をつくり、鶏を飼うなど、食糧事情は深刻なものでした。通学には神通大橋を渡りましたが、当時は木造で、洪水で流失したこともあります。そのときは笹舟で渡ったものです。川原には、ごく普通に空襲時の焼夷弾の残骸が落ちていました。

学生生活は経済的に乏しく、1冊350円の植物図鑑が欲しくて、夏休みに1日50円で土方をしたこともあります。しかし、自然は今よりも豊かで、例えば初夏には、国鉄富山駅のホームに、近くの池沼からチョウ・トンボが、ゆったりと飛来してきたものです。

今、新たな思いで正門をくぐり、整然とした構内、立ち並ぶ各学部、行き交う人と車、当時見られなかったハルジオンや、ヒメオドリコソウの帰化植物など、目を見張るものがあります。学園と、それを取り巻く自然環境の大きな変容には、隔世の感があります。そんな中で、ふと目に止まったのが、正門に入って左にある大きな桜です。梢が枯れ年は取ったが、樹形に当時の面影を見ることができました。花も見事に咲き誇り、まさに古木開花して勤外の春を思うのです。

当時の生活は貧困でありましたが、チョウ・トンボの遊飛が指標するように自然は多様で豊かでした。もちろん、いやなカヤ、ブユもいました。今はその点、快適で生活は豊かです。しかし、逆に自然は単調になり、また貧困になっています。科学技術が進歩し、生活が便利になればなるほど、生活の母胎である自然の、基本的な理解がより重要になります。「自然に親しみ、自然を理解し、自然に対する分別がつく」。理科教育の身近な課題のように考えるのです。

## 着任のごあいさつ

教育学部講師 石井 哲夫



このたび教育学部音楽科で器楽を担当させていただくことになりました。富山大学へ来る前は、都立野津田高等学校に3年間、その後考えるところがありまして、同じ東京の日本電子専門学校に5年間ほどおりました。

北陸へは、学生の頃3度ほど来たことがあります。富山は今回が初めてです。ここは湿気が充分なためでしょうか、東京にいた頃悩まされていたひどい咳がピタリとおさまり、たいへんありがたく思っております。また現在の住居のベランダからは、北アルプス、立山連峰のながめがすばらしく、学生の頃山登りの趣味（ハイキングの延長程度ですが）のあった私には、大変嬉しい所です。

音楽科では、3、4年生のピアノ奏法を中心に、ソルフェージュ、音楽通論を担当させていただいております。私自身の専攻はピアノですが、その中でも近代

フランス音楽におけるピアノ曲、特にドビュッシー前期の作品を中心に、これまで勉強してまいりました。これからはフランスの中、後期の作品、またドビュッシーと同時代の他の作曲家（ラヴェル、ピエルネ等）の作品について、さらに演奏上の技法にとどまらず、作曲上の技法にも研究の巾を広げてゆきたい、と思っております。

また、最近ではピアノ曲に限らず、国民楽派以後の民俗的素材を取り入れた作曲家達の作品にもおおいに興味があります。ごぞんじの方も多いと思いますが、民謡などのリズム、旋律を作品の中に取り入れた作曲家は古い時代からたくさんおりましたが、たとえばポピュラーな作品「ハンガリー舞曲」（ブラームス）、「ハンガリー狂詩曲」（リスト）等に取り入れた素材が、後にバルトーク、コダーイらの研究によって真のハンガリー民謡のものではない、ということがわかりました。これは、ひとつには時代と共に交通機関、情報機関が発達し、民謡等の素材が集めやすくなったためと考えられますが、現代ではこれらの交通機関はさ



らに大きく発達しました。このような状況下で、民俗的素材と芸術音楽がどのように関わってゆくようになるのか、大いに興味あるところです。

少々、自分の研究についての話に片寄ってしまいま

したが、なんと申しましても私は大学の教官としてはまた駆け出しどころか、やっとスタートラインについたというところです。多くの先生方から御指導いただければ幸いです。よろしく御願ひ申し上げます。

## 着任のごあいさつ

教育学部講師 河本 肇



旅などで初めて訪れた街の、何とも言えない「におい」。そして、自分の感覚だけを手がかりに、その見ず知らずの街を歩く。これを繰り返したいばかりに旅に出かけたりするものです。富山——新しく「におい」を感じることのできた街が、また1つ増えまし

た。ただ、もはや「旅人」としてではなく、「生活者」としての街に変わりつつあります。

私は、生まれてこのかた、神戸—大阪—東京—広島と太平洋ベルト地帯をひたすら東西にのみ移動していました。今回初めて、それを乗り越えて日本海側にやってきました。したがって、初の南北間大移動をしたこととなります。この大移動がもたらす最大の相違は、言わずもがな、雪に直面するか否かだと思います。しかし、これは冬までお預けです。

さてそれ以外にも、これまでの街と違うなあと感じ

られることが幾つかあります。例えば、山は北に位置し川はそこから南に向かって海に注ぐものと、知らず知らずのうちに頭にたたき込まれていましたので、富山大橋を渡るとき未だにどちらに向かっているのか迷ったりします。また、冬でもないのに風がきついことに驚かされます。天気予報で、アメダスによる県内各地の風速・風向を伝えるのを見たのは初めてでした。

この3月まで、学生は大学院生のみという極めて特殊な所に助手として勤務しておりました。年齢差はもちろんのこと、学部生と院生とでは生活のスタイルにこうも違いがあるものかと、こちらに来て新たに認識しました。心理学では、初期経験がその後の行動を規定すると言われていました。そうした意味からすれば、私の研究のスタイルは、大学院生の頃に形成されたように思えます。そして、教育（指導）のスタイルはといえば、まさしくここ富山大学で作られることとなります。それだけに、よりいっそう衿を正して励まなくてはと思う次第です。今後ともよろしく願ひ致します。

## 新任のごあいさつ

教育学部講師 前田 あけみ



少し早めに桜が満開となったキャンパスが、私を迎えてくれました。まだ峰の白い立山を仰ぎつつ、「私を育ててくれた郷土富山は、こんなにも美しかったかしらん」と、ちょっとした感動で始まった新しい生活です。担当は、保育内容の研究です。

私が専攻してきましたのは児童学、特に関係学を基盤とした幼児集団指導です。子どもが自己と、人と、物とどのようにかかわり発展していくのかについての、実践即研究即養成活動を進めてきました。そしてその関係分析・改善の具体的手法として心理劇を活用してきました。

これまでは、短大での保育者養成、幼稚園や保育園へ出向いての保育相談（必要に応じて個別臨床）、自分が母となってからは社会教育の育児学級の講師等も

勤めてきました。さらに関心は婦人問題へも拡がり、ある自治体の女性ネットワーク作りの仕事にも携わりました。もし、人に「本来は何をする人？」と尋ねられたら、「そうね、人間に関すること何でもよ。おもしろいと思ったら、どんどんやってみること自体が好きなんです」と答えます。

そんな私は国立大学の教官には向いていないのではと不安に思いつつ、半期が過ぎました。「思ったより窮屈な所でもなさそう」というのが、率直な感想です。そう思えるのは、一つには学生の資質が高いこと（保育者に求められる、共感する心・変化する柔軟性・分析する客観的な目を持っている）、二つには課程のスタッフとそれぞれ専門性を保ちつつ、有機的協力関係が得られること、三つには今まで私の一見パラバラにやってきたことが一つに繋がって生きてくるように思えること、にあります。今の生活を数字に表わすとすると、快適度90%です。

あとの10%は、卒論指導を10人もせねばならないことと、家政学部児童学科育ちの私には、教育学部が何か自分で自分を狭めているように思えてならないこととからくるものです。生涯学習がうち出され、教育に求められるものは多様になりつつあります。また幼児教育に関しても、幼稚園ばかりでなく、働く女性の増大に伴い保育園への、しかも乳児保育への要求が高まっています。さらに、様々な歪みから生ずる問題に個別に対応できる臨床家が不足していてもいます。あるいは家庭教育の充実を積極的に進める活動も今後必要となるでしょう。このような流れの中で、教育学部自体が、学校教育をどう相対化するかが問われているように思えます。

そして私は、こんな小生意気なことを正式な場で述べても「~のくせに」と言われぬだけの、実力と実績を持ちたいと思っております。

今後ともよろしくお願い致します。

## 新任の御挨拶

経済学部教授 島 十四郎



本年4月1日付で、経営法学科の企業関係法担当（手形・小切手法、本来は大学院で国際取引法の予定）として着任しました島十四郎です。私は名前の通り、大正14年生まれで、この3月末で前任校、筑波大学（社会科学系）を定年になりました。昭和とともに

生きて来た私としては、昭和の終わりは一つの区切りと思いましたが、本学からのお誘いを受け、2年間の短期間であり、無理のきかない健康状態ですが、富山大学の発展のため微力を尽くしたい考えでおりますので、よろしくお願い致します。

京都市生まれですが、学校は小学校以来、東京です。旧東京府立一中（現日比谷高の前身）に入学した年に日中事変が始まり、海軍機関学校（後に海軍兵学校舞鶴分校）に入校して一週間後に2次大戦の勃発というように戦前は戦争とともにあったといえる状態で、今の若い諸君には想像もつかない体験をした世代です。戦後、旧制第一高等学校（理科甲類一甲類とは第1外

国語英語、第2、第3は独語、仏語でした）を卒業しましたが、途中で、肺結核のため通算10年にわたる闘病生活を余儀なくされ、9回の手術で肋骨9本を切除、青春の大部分を病床で暮らしました。そのため本来の希望であった化学専攻を断念し、東大法学部に入り（動機は出席しなくても卒業できること？）、法律を専攻するようになりました。卒業時、幸い然るべき成績を得ていたため、故石井照久教授のお勧めもあり、その指導のもとに、東大法学部助手として研究室に残り商法学の研究に志すことになった次第です。今までの勤務校としては東大助手から赴任した熊本大学に11年、筑波大学に13年です。それぞれの地はそれぞれ良い処で懐かしい思い出があり、第2、第3の故郷のような気がしています。日本海側に住むのは遙か昔、海軍時代に舞鶴にしばらくいた時を除き初めてで、富山に足を踏れたのは最初ですが、第4の故郷となることを願っています。

戦中派は、よく「余禄の人生」ということを申しませんが、私も戦争（海軍同期の約4分の1が20歳前後で戦死）、と病気（今と異なり、戦後間もなくは結核は死に至る病でした）を経て「余禄の人生」が長くなり

今日まで生延びたことはよほど悪運が強いと痛感する最近です。

## 着任に当たって

経済学部教授 澤田利夫



私は、文部省で産業教育に関する調査研究・指導助言の仕事に教科調査官として8年間、その後、日本橋の私立女子短大の開設・運営に学科長として2年間携わり、この度、本学の経済学部経営学科に籍を置くことになりました。この間、国連の依頼でフィリピン、タイ、インドに渡り、ビジネス教育に関して現地の教育関係者に指導助言を行うという貴重な経験も経ました。

これらの経験を踏まえ、目下、経済のサービス化・ソフト化に関連して、サービスの本質と広義のサービス産業・職業の経営特質に関する問題に関心を寄せております。本年3月には、その若干の成果を「サービス経営論」として実教出版(株)から上梓しました。

ところで、最近、日本の産業には、知的サービス機能を機軸とした構造転換が進行しております。例えば、製造業等の物財産業においては、より省力化・小ロット化できる新たな機械の企画・設計、サービス供給に必要な機材やサービスを体化した製品の開発を行う知

的サービス機能のウェイトが増大しています。

また、広義のサービス産業においても、物財産業の知的サービス機能の外部化、情報機器等の導入による資本・技術集約化が進み、そのウェイトは、昨今の対事業所サービスの増大に見られるように、伝統的な単純肉体労働に依存するサービスからより知的機能を持つ専門サービスに移っています。

こうした産業の動向に対して、行政の面でも、例えば、5月に国土審議会の政策部会が四全総の推進に関する中間報告をまとめ、地域経済発展のための有力な行政施策として、情報サービス・デザイン・研究開発等の先端的サービス産業の導入拡大を提言しています。同様の施策が、富山県を含め全国の都道府県において構想あるいは実施されています。

これらの知的サービス化の全国的な潮流にあって、本学が一層その枢要な情報発信拠点となることを願っております。着任して日もまだ浅く、周囲の状況について目下勉強中というところですが、幸い、これまで教職員の方々や学生の皆さんとの温かく誠実な交流に恵まれました。今後とも、よろしく願い申し上げます。

## 新任のご挨拶

経済学部教授 田中祥子



4月1日付けをもって富山県立技術短大応用数学科から、経済学部に着任しました。経営学総論を担当いたします。

27年振りに母校に戻って参りましたが、永の歲月故、まったく新しい所にやって来たという感じがいたします。従っ

て何をすることも教えていただかないと動きがとれません。4月から、先生方や事務官、学生の皆さんに随分ご厄介になっております。どうぞこれからよろしくお願い申し上げます。

さて、講義につきましては、以前は理工系の小ぢんまりしたクラスで話していましたので、これから大教室で総論をやるということにささかの戸惑いもございいますが、経営学への誘いの役目をいただいたので、

自分なりの工夫をこらさねばと思っています。

また、私自身の研究は、これまで、前半は設備投資、後半は証券投資の問題を主に扱ってまいりました。現在は昭和56年頃から始めたオプション評価（基本資産を将来時点で売買する権利の価格付け）等について勉強しています。オプションという言葉は最近新聞に出てまいりますので、学生諸君の目にも止まるらしく、勉強してみようという学生が私のゼミに入ってきました。若い人達との交流を楽しみにしています。

残る余白に私の個人的属性について少々記させていただきます。

出身校は、蟻川小学校、堀川中学校、富山高校、富山大学経済学部、神戸大学大学院経営学研究科です。おそらく可成の同窓生がおいでになることと存じます。

酒・タバコはやらず、芸なしで、仕事とおさんどんを専らやっております。趣味という程の暇も金も使えないのですが、その辺の野草が好きで、活けてよし、食べてよし、ウオッチングまたよしです。

キャンパス・メインストリートの並木は私の在学中にはなく、辞令をいただきに来た日、何の木かと思ひ直下に立ちました。葉の形状からして半てん木であろうと思いましたが、名札に「ユリノキ」とあります。そこで私の気がかりは半てん木が俗名かどうかということになりました。調べたら思った通りでした。学会等で訪れる他大学でも大樹のあるキャンパスは心に残るものがあり、この並木も見事に育てよと願わずにはおれません。

## 新任のご挨拶

経済学部助教授 山本直孝



今年4月、本学経済学部教官の末席に連なる迄は信託銀行に勤務していました。信託銀行は通常業務のほか各種の信託業務ならびにその他の業務を営んでいますが、私は一貫してその他の業務の範疇に属する証券代行部（株式の名義書換代理人業務を行う部門）

にあって会社法を中心とする法律実務に携わって来ました。

実務家の私が大学教官になるということは、他の先生方が教官になるべくしてなられたのとは異なり、よくいえば異色、悪くいえば場違いなところへ飛び込んだということになるのかもしれませんが。

これ迄の経歴を振り返ってみますと、最初に就職した会社は親戚の紹介によるものであり、その会社が合併によって信託銀行になったものですし、さらに本学の一員に加えて頂くことになったきっかけも仕事の課程で縁あってご指導を仰ぐことになった先生のお薦めによるものですから、すべてお世話になるままに過ごして来たわけで、その意味で立志的でないこと甚だしいものと思わずにはいられません。このような過ごし

方をすることができたのは単に幸運に恵まれたということなのか、それともこれが定められた運命というものであったのかというようなことを時々考えることがあります。

趣味はといえばスポーツが好きで野球、テニスをやっていましたが、近年腰痛に悩まされるようになってからは専ら観戦に回っています。この点で野球場が隣接しているのは幸いなことで社会人、高校野球を観ることができるのを楽しみにしています。そのほかは音楽を聴くこと位で、サラリーマンの交際手段とされる酒、マージャン、ゴルフについては酒は体質的に合わず、マージャンにも余り興味はなく、ゴルフも前述の腰痛でというわけで、これでよくサラリーマンが勤まったものと我ながら感心しています。私が無趣味な人間であることは、当地に単身赴任をすることを知った殆どすべての人から何か趣味を持ってといわれたことから、余り自慢できる話ではありませんが、明らかです。

このように平々凡々、学問的にも覚束ない面がありますが、過去の法律実務を通して得た知識と経験を今後の講義、研究に大いに生かし、私なりのものを打ち出していきたいと考えています。皆様のご指導ご鞭撻をお願いする次第です。

## 新任の挨拶

経済学部講師 山本 弘



4月1日付を以て本学経済学部講師に着任しました。

私にとって北陸地方での生活は初めての経験です。富山は夏暑く冬雪深い土地と聞きます。高校を卒業するまでの大半を酷暑で有名な名古屋で、大学入学後の12年間を東京のコンクリート・ジャングルの

中で、それぞれ過ごした身として、暑さには慣れていますが、雪というものは殆ど体験がありません。スキーをする趣味がない為、何十センチも積もった雪など見たこともないのです。尤も、最近の暖冬傾向のなせる業か、3月中旬に赴任手続の関係で当地に来る途中生まれて初めて上越国境を越えたのですが、「国境の長いトンネルを抜けてもそこは雪国ではなかった」。些か拍子抜けしたのですが、これは旅行者の抱く感想であって、生活者のそれではありません。鈴木牧之の名

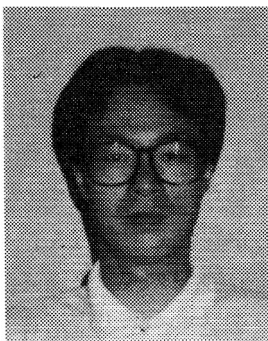
著「北越雪譜」を引くまでもなく、生活者にとって雪ほど厄介千万な存在はないようで、今から身を引き締めている次第です。

私の専攻は民事訴訟法、即ち民事事件に関する訴訟手続を規律する法律です。同じ訴訟でも刑事訴訟は、警察物・裁判物のドラマや推理小説等で一般の方々にも或る程度馴染みのあるものかもしれませんが、民事訴訟となると、マスコミネタになることも余りなく、かといって普通の市民は一生に一度も関わりを持たないことが通常の代物として、具体的なイメージを描き難いものようです。それどころか法学専攻の学生にとっても民事訴訟法は難解なものらしく、「民訴（民事訴訟法のこと）は眠素に通ず」などという駄洒落があるくらいです。この難物を如何にして学生諸君に理解してもらえるよう講義すべきか、昨今頭を痛めています。

土地・仕事共に不慣れな私ですが、皆様の御援助を賜わり、職務を全うして参りたいと存じます。何卒宜しく御願い申し上げます。

## 新任のあいさつ

経済学部助手 中村 博之



平成元年4月1日より経済学部経営学科に助手として勤務しております。今年1年は講義、ゼミ等をうけもたないため、このようなご挨拶をさせていただくことで、富山大学の一員になったのだということを実感しております。

まずは自己紹介から。出身地は青森県青森市です。やはり青森も富山同様に自然に恵まれ、ありあまるほど雪の降るところです。よって、以前より北陸地方には親しみを感じており、旅行で来たこともありました。幼い頃からの習慣で、冬の暮らし方については自信を持っております。そのかわり、富山の夏の暑さのことを聞いたときはショックを受けました。夏をどうのりきるか。今後の課題といえ

そうです。さて、私の経歴ですが、富山大学は私にとって3つめの大学です。というのは、大学は横浜国立大学、大学院は一橋大学と渡り歩いてきたためです。小学校時代からよく注意されたように、落ち着きがないようで、1つのところにじっとしておれず、積極的にあちこち動き回る性格です。新天地富山でも、いろいろなところに行ってみたいと思っています。

10年近く東京にいましたが、時間が非常に速く過ぎ去っていったような気がします。富山に来てからは雑音から開放されたせいかゆっくりと時が流れていくようです。大切なことを考える時間が増えました。つい2ヶ月前まで学生だったわけですが、その時にくらべて時間を有意義に使えているような気がします。今のところ順調に研究が進んでいるようで満足しています。

実際に学生の皆さんと対面するのは来年ということ

で少し残念ですが、それまでに私の方も準備しておきたいと思います。ゼミに学生が来てくれるのか不安ですが楽しみです。肩の凝らないゼミにしたいと思っています。これからは、学生、教官、事務官と皆で力を

合わせ、富山大学がより一層すばらしい大学になるように期待しております。微力ながら私も頑張るつもりでおります。よろしくお願い致します。

## 就 任 の 御 挨拶

理学部助手 古 田 高 士



このたび4月1日付けで理学部数学科、応用解析学及び電子計算機論講座に助手として着任いたしました。私は新潟県新津市出身で、新潟大学理学部数学科、新潟大学大学院で学びました。専門は幾何学で、現在(概)複素多様体や等質空間、そしてそれらの

特性類などを研究しています。

今日、たとえば、幾何学と関数解析学が結びついた非可換微分幾何学や、幾何学と情報科学が結びついた情報幾何学など、いくつかの分野からそれぞれ有効な手法を選び、それらを総合し応用するような研究も盛

んに行われるようになって来ました。私もこのような広い視野から、数学を、そして科学を研究して行きたいと思っております。

新潟から緯度を約 $1^\circ$ 南下し、経度を約 $2^\circ$ 西に進んだこの地に来て、はや2ヶ月が経ちましたが、親切な諸先生方、澁刺とした学生達に囲まれ、大変幸せに感じております。こんなに恵まれた研究環境の中、これからますます勉強や研究に励まなければならないと思っております。

今後は、富山大学の皆様のご指導を賜わりながら、自分の任務を全うし、微力ではありますが、富山大学のますますの発展に貢献できますように、一生懸命努力する所存でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

## 新 任 の 挨拶

工学部助手 西 野 精 一



3月16日より、工学部機械工学科動力熱工学講座の助手として赴任して参りました。専門は材料強度学で、特に高温下で使用された耐熱金属材料の寿命があと何年あるのかをX線や超音波で非破壊的に診断する方法についての研究を中心に行って来ました。本

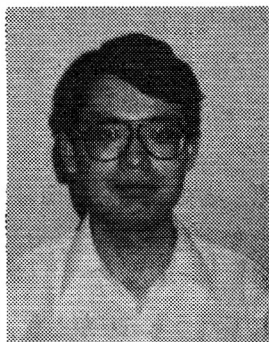
学では、金属材料高温強度だけでなく、常温での疲労や腐食環境下での材料強度等、幅広い研究を進めるとともに、従来の金属材料では使用できない様な超高温下で利用する材料の研究にも挑戦して行きたいと考えています。

ところで、私は愛媛県松山市で生まれ、愛知県で育ち、学生時代を京都で過ごして来まして、北陸地方に来たのは生まれてはじめてです。したがって、何十センチも積もった雪はスキー場でしか見たことがなく、この度富山に来て、縦に並んだ信号機やスパイクタイヤで削り取られたセンターラインを見て、冬の生活に少し不安を感じつつ、反面楽しみにも思っています。私が富山で最も気に入っているのは、額から飛び出した様な立山連峰の美しいながめで、時々研究室の窓から見入っています。

今後、微力ですが本学での研究、教育活動に尽くして参りたいと思いますので、諸先生ならびに技官、事務官の皆様の御指導をお願い申し上げます。

# 新任のごあいさつ

工学部助手 土屋 隆 生



この4月から工学部電気工学科通信工学講座に着任致しました。生まれも育ちも大阪で、大学・大学院と京都御所の隣の同志社大学で学生生活を送りました。これまで、人生の節目ごとに北へ北へと活動範囲を広げて参りましたが、今回は一気に北陸・富山とい

う私にとりましては、とんでもなく北へやって来たという印象です。しかし、富山に来てほぼ1ヶ月、まだ雪の恐怖を知らないせいか、当初の印象とは異なり、自然に囲まれたすばらしい所だと感じております。

さて、私の専門は音響工学です。“音響”と言いましても、いわゆる“オーディオ”ではなく、耳に聞こ

えない超音波の研究を行って参りました。特に、大きな音圧の超音波を放射した場合の音波の非線形な挙動についての研究を進めてきました。このように書くと、非常に堅苦しくなりますが、超音波の非線形な性質をうまく利用しますと、つくば博でも展示され話題になった超指向性スピーカ（パラメトリックスピーカ）や超指向性マイクロホンが簡単に実現できるようになるのです。今後はさらに広い視野をもって、音響を対象としてあらゆる角度からの研究に一層励みたいと考えております。

まだまだ未熟の身でございますため、皆様にはご迷惑をおかけすることも多々あるかと存じますが、研究・教育に微力ではございますが、全力投球する所存でありますので、何卒ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

## どうぞよろしく

教養部教授 神 垣 知 夫



こんど物理学を受け持つ2つのクラスの諸君に、出身県、高校、使った教科書、物理の事項の理解の程度などを尋ねてみました。出身県は北海道から四国や九州まで分布しています。そのありさまは表に示すとおりです。クラスIは

理学部の化学、生物学、地球科学、クラスIIは工学部の金属、工化、化工、生産機械などの学科の人が主になっています。

クラス	I	II		I	II
北海道	4	1	愛 知	1 0	4 2
青 森	1	—	三 重	1	2
栃 木	1	1	京 都	4	6
群 馬	5	3	滋 賀	—	3
埼 玉	1	1	奈 良	1	1
東 京	2	—	大 阪	5	5
神奈川	4	1	兵 庫	1	5

千 葉	1	—	和歌山	—	1
新 潟	3	3	鳥 取	2	1
富 山	1 9	3 6	岡 山	1	—
石 川	4	1 8	山 口	—	2
福 井	6	5	愛 媛	1	—
長 野	7	3	高 知	—	1
静 岡	4	4	長 崎	1	—
岐 阜	3	1 1	合 計	92	156

全体の傾向として、富山県の人が多くて、隣の県の人次いでいます。著しいことは、愛知県の人かなり多く、富山県を上まわっているクラスもあります。隣の席の人が、地図で名を知っているだけの土地の生まれかもしれません。これからの学生生活の上で、良い友達がこの出会いから生まれることを期待します。

一つの高校から入学した人は多くても8人、ついで4人、ほかは3人以下です。このように出身校がかたまらないのは良いと思います。知った人どうしが、今日は休もうやと一決して、ゴッソリ居なくなったりするのは、どうも気持の良いことではありませんからね。

高等学校の理科の教科書は、理科I、物理、化学などそれぞれ15種類以上もあるのですが、諸君が使ったものは僅か3つの出版社のものに集中し、そのうちの一つがダントツでした。これでは、その教科書を使えば富山大学は絶対ということになりそうです。しかし、実際は全国的に見てもこういう分布をしているのでしょうか。上の表の県の間には偏りがなく、どこもこんな傾向のようです。しかし、教科書はどれも著者の先生方が自信を持って書かれている筈で、どれかに集中することなく使われているのではないかと感じておりました。ちょっと意外な感じがします。

物理の事項の理解の程度は、ある個人がどうということではなくて、全体としてどの方面の事柄に自信があり、どの方面を手落ちと思っているか、傾向を知りたいと思って尋ねてみました。たとえば気体の状態方程

式はほとんどの人が自信を持っているのに対して、ジュールの法則とは聞かれると自信のない人が非常に多いといった具合の答えでした。もちろん、物理は言葉の意味だけ博物学的に知っているだけでは不十分ですし、その言葉の背景にある事柄の物理的な意味を理解していなければなりません。これからの講義では諸君の答えを参考にして、何とか工夫してみたいと思います。苦勞して難関を突破して来たポテンシャル・エネルギーが高い間に、それを基礎としてもっと高くもっと興味深い物理学の世界に案内してみたいと思います。

どうぞよろしくお願いします。

皆さん、ていねいに答えてくれてどうもありがとう。それから、資料のお世話になった入試事務室の皆様にもお礼を申し上げます。

## 新任のごあいさつにかえて

教養部講師 井上逸兵



<生まれたところ>

愛知県一宮市

<多感な少年期を過ごしたところ>

石川県金沢市(注1)

<驕慢な青年期を過ごしたところ>

東京都杉並区

<富山で気に入ったこと/もの>

>

路面電車(注2)。立山連峰の大パノラマが楽しめて、目の玉が飛び出るほど家賃の安いわが宿舎。空気がきれいなこと(注3)。

<富山で気に入らないこと/もの>

雨(注4)。となりの中学校のグラウンドで早朝野球のおじさんたちの声がうるさいわが宿舎(注5)。プロ野球の試合を見に行けないこと。

<好きな言葉>

酒は百薬の長

<専門とする分野(注6)>

英語学・言語学(注7)

<教職員の皆様へ>

このような愚か者ですが、よろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。

注

(注1) 私の両親は関西の人間で、今は長崎に住んでいます。全国を転々としたわが家ですが、私はここが故郷だと思っています。

(注2) まだ乗ったことがない。

(注3) 東京ではいつも念入りに手入れをしていた鼻毛がこちらに来てさっぱり伸びなくなりました。

(注4) 主に、わが妻の嘆き。

(注5) 女子中学生のブルマ姿がまぶしいわが宿舎、でもある。

(注6) 少しまじめに。

(注7) 意味論、語用論、社会言語学、記号論といったあたりなどを深めたいと思っています。



## 新任の御挨拶

教養部講師 上野 隆三



4月より教養部で中国語の授業を担当することになりました。兵庫県の西宮市に生まれ育ち、大学時代は京都に住んでおりましたので、近畿以外に住むのはここ富山が初めてです。これまでに私が富山に来ましたのは1度だけ。中学3年生の夏、学校の立山キャンプに参加した時でした。弥陀ヶ原にあったうちの学校の追分小屋という山小屋は、そばの道を通るバスの中でバスガイドが紹介するほど由緒正しき、すなわち今にもくずれ落ちそうな小屋でありまして、外側につっかえ棒があるのは仕方ないとして、部屋の中にもつっかえ棒があったのには驚きました。中・高一貫の私立男子校でしたので、この小屋にはむくつけき男子生徒約90人とさらにむくつけき男の先生8人、男ばかり約100人が泊まっているという、今から考えるとなかなか異様な状況でした。トイレは水洗だぞと言われてお

り、こんな小屋に水洗便所は似合わないなと思いながらトイレに行くと、便器の下をかわいい小川が流れておりました。2日に1回の掃除の時は班に分かれてくじを引く。しかし部屋、小屋の外、食堂、便所などのくじの他に“くずし”というくじがあり、一体これは何だろうと思っていると、一人1本長い棒を渡され例のかわいい小川の下流に走る。つまり自然の小川を利用するため、途中の草に引っかかったり流れをせきとめる場合もある。そこで棒でつついてそれをくずすという…。なつかしいこの小屋も今はもう無いそうです。

私は明清代の白話小説、今は「三国志演義」を中心に研究しております。そして今年3月初めまで1年半、中国の南京に留学しておりました。中国語力の向上はもとより、中国という国に生で触れることにより、専門の研究においても新しい見方ができるようになったと思います。富山の風景の美しさ、食べ物のおいしさには感激しました。このすばらしい環境の下、なお一層努力し研究をすすめていきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

◆ アメリカ滞在記

## ミシガン湖畔の思い出

工学部助教授 五嶋 孝仁



成田を飛び立ってもう10時間近くになる。カーテンを開くと朝のまぶしい光と伴に、真白な雪に覆われた壮大な山並が眼下に広がった。たぶんカナディアンロッキーに連なる山脈であろう。ついにアメリカ大陸に来たという実感が少なからず興奮を覚えた。3

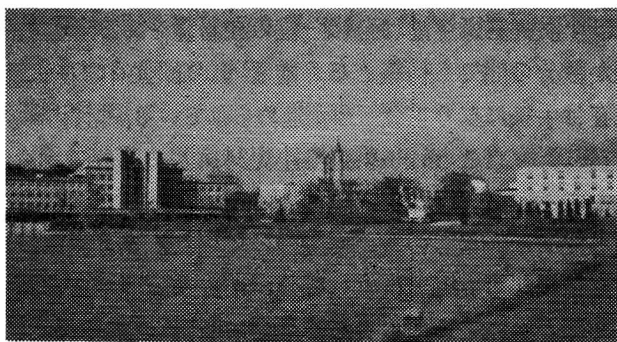
才の長女はカゼ薬のせいにか私の横の座席で死んだように眠っている。日本を出発する前日から高熱を出し、まだ熱が下がっていない。1才になったばかりの次女も妻のひざの上で機嫌が悪い。額に手をやると燃えるように熱い。

1988年3月27日午後1時25分私たち家族をのせた、

ノースウエストオリエント航空はシカゴのオヘア国際空港に到着した。思いがけぬ高熱に見まわれた幼い2人の子供を抱えての惨たんたる13時間のフライトであった。オヘア国際空港は全米一位の発着量を誇る空港で、僅か数分の間でも何機となく離着陸が繰返されていた。現在は手狭になり拡張工事が進められている。到着早々最初に行ったことは子供達を小児科病院に連れて行くことであった。通常は電話による予約が必要であるが、朝と夜は予約なしの急患を受け付けていたので助かった。長女は単なるカゼで次女は軽いotitis-mediaだと診断された。始めて耳にする医学用語に面食らっていると、ドクターはゆっくりと明解な英語で丁寧に説明してくれた。どうも中耳炎らしいことがわかった。抗生物質の名前の書かれた処方せんをもらい、Drugストアで薬をもらうといった具合に、完全な医薬分業である。

この時以来、滞在中にこの小児科病院には何度となくお世話になることになった。

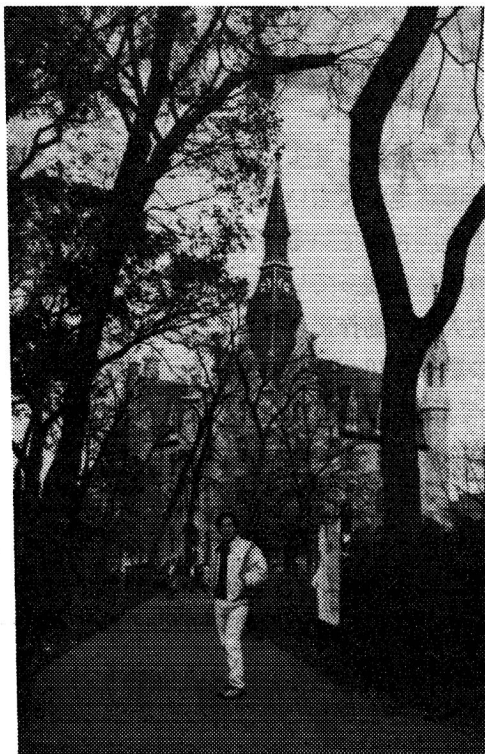
さて私の留学地エバーストンは、シカゴのダウントウンからミシガン湖に沿って北へ約20km位の所に位置する、人口約7万の緑の多いミシガン湖岸の美しい大学町である。アメリカは一般に水が良くないと聞いていたが、ここエバーストンはミシガン湖のおかげで富山のように水質が良く、近隣の町から水をもらいに来る人がいる位である。湖と言っても日本の湖の感覚ではなく、まさに日本海に面しているのと同じ感覚だと思って預ければよい。夏には海水浴ならぬ湖水浴が楽しめる。ミシガン湖畔に沿って多くの湖水浴場がある。私は文部省の在外研究員としてここエバーストンにあるノースウェスタン大学のTechnological Institute（工学部）に10ヶ月間滞在した。ミシガン湖をバックにして231エーカーのキャンパスがエバーストンの町の一角に広がっている。キャンパスのあちらこちらにリスや野うさぎが飛び回り、まさに森と湖のキャンパスである。1851年にエバーストン氏（エバーストン市の名前の基になった人）によって創立されたこの大学は、当初10人の学生から出発したと言われている。現在はシカゴ大学と並んでアイビーリーグ大学に匹敵する中西部第1級の大学へと発展している。シカゴのダウントウンにも医学部を始め4つの学部があるが、エバーストンキャンパスには私がいた工学部を含め8つの学部がある。学生総数は12,100人（内大学院4,700人）、年間の新入学生は1,800人であり、教授陣は1,335人である。工学部、音楽学校、経営大学院は全米ランキングトップ5に入っており、ことに経営大学院は昨年ハーバードを抜いて全米1位となった。また音楽教授陣の内16人はシカゴ交響楽団のメンバーでもある。



ミシガン湖側から見たノースウェスタン大学のキャンパスの一部（右端が筆者のいた工学部）

私は工学部のCivil Engineering Department（日本では土木工学科に相当する）でProfessor L.M.Keerのもとで研究を行うことになった。Keer夫妻とは以前すでに面識もあり、また夫妻は来日経験もある親日家である。Keer教授はまだ50才台で、工学部のAssociate Dien（副学部長）の地位にあり、またASME（アメリカ機械学会）のJournal of Applied Mechanics部門のEditor in Chiefでもある。かなり忙しい人であるが研究上のことではよく相談にのって頂いた。大学院生に対してもかなり面倒見が良い先生のものであった。Keer夫妻はユダヤ系アメリカ人でありことに夫人は熱心なユダヤ教徒で、宗教上汚れているとされる4つ足の動物の肉は決して食べない。だからホームパーティでご夫妻をお招きするとき等、私の家内は料理にかなりの気を使っていた様である。アメリカでは人種の事を口にすることはタブーとされている。間違っても「Negro」とか「Jew」等という語を口にしてはいけない。（数年前どこかの国の総理大臣がこのタブーを破ってひどい目に会ったが……。）ユダヤ人はどういう訳かアメリカ社会ではあまり良く思われていない。しかしユダヤ人抜きでアメリカは語れない。在米ユダヤ人は全人口のわずか3%そこそこであるが結束力に富みそのほとんどが大都市に住んでいる。政治、経済、文化と言った多岐の分野で頭角を現している。著名人はまずユダヤ人と思えば間違いない。ユダヤ人を敵に回すとアメリカ経済は麻痺してしまうだろうとさえ言われている。子供が通っていたプリスクールが9月末のある水曜日に休みとなった。この日はシカゴ近郊の公立の学校もすべて休みであった。しかしいくらカレンダーを見てもこの日に休日のマークがついていない。理由を聞いて驚いたが、この日はユダヤ教でヨム・キップール（贖罪の日）と呼ばれ、ユダヤ人の儀式の中で最も重要な日だと言うことであった。このように特定の宗教のために公立の学校が休みになるとは、日本では信じられない話である。ユダヤ人の影響力の強さを垣間見たような気がした。何かの本でユダヤ人はまた、自分の家庭を非常に大切にするという記事を読んだことがあるが、Keer教授自身も家族を非常に大切にしているようであった。私は日本の感覚で到着後すぐにKeer教授に挨拶に行き、すぐに仕事の話を始めようとしたが、私の子供たちが病気だと聞くと、「あなたにとって一番大切なものは家族なんだから、大学にすぐ出て来ないで十分に家族の面倒を見るように」と言われた。私も家族は大切にしているつもりであったが、

改めて家族のあり方を教えられた。Keer教授には10ヶ月間公私共に色々とお世話になりその思い出は尽きない。



キャンパス内で現存最古の建物（1869年建造）、現在は英語教室として使われている。

せっかくアメリカに来ているのだから研究室の壁だけを見て帰るのではもったいないという意見に忠実に従い、色々なところを旅行して回った。いわゆる大観光地と言われるナイアガラの滝やニューヨーク、ワシントンDC等へも行った。そのような所には必ずと言っていい程日本人がいる。カメラを手にかなりいい身なりをしている若い東洋人はまず日本人だと思えば間違いない。それぞれの観光地もそれなりの良さはあったが、私にとって忘れられない旅は夏のミシガン湖一周の旅である。単に湖を一周と言っても4泊5日のドライブである。途中の名も知らぬミシガン湖畔の小さな

町で、日本のいわゆる大衆食堂のようなところに入ると、隣のテーブルで食事をしていたおばあさんが気さくに話かけてくる。子供たちに「おばあちゃんのところに行くの？」等と優しく話しかけている。自分にも同じ位の孫がいて、夏に帰って来るのを楽しみにしているそうである。別の古い小さな町では白髪のおじいさんが私達と通りすがりに「コンニチワ」という日本語みたいなことばをしゃべったような気がした。驚いてふり返ると、「コンニチワ」が通じたと言って嬉んで、あとは残念ながら英語で話しかけて来た。若い時に進駐軍として日本に行ったことがあるのでなつかしい、等と人なつこく話していた。

一つ一つの心暖まる出会いをあげれば枚挙にいとまがないが、人々の何げない小さな行動の中に、アメリカ人の他人を思いやる心の暖かさを感じた。名も知らぬミシガン湖畔の小さな町に住む見知らぬ人々との出会いの中に、古き良きアメリカを発見したような気がした。



Keer教授夫妻と（ホームパーティにて）

## 特定研究

### 『ヒトの基本的運動の定量解析』

教育学部講師 堀田 朋基

走る、跳ぶ、投げるという運動は、日常生活において最もよく見られる人間の基本的運動であり、あらゆるスポーツの基本となる運動である。したがって、基本的運動における身体の動きのメカニズムを明らかにすることは、各種スポーツにおける指導法の基礎資料を得ることにもなり、体育学の分野では重要な意義を持つものである。

本研究では、ヒトの基本的運動（走・跳・投運動）における各年齢層での身体の動きのメカニズムを動作と筋肉の動きの両側面から定量解析し明らかにすることを目的とした。現在までの段階で幼児と大人の跳運動および大人の投運動について実験を行っており、走運動については実験継続中である。以下に、これまでの実験経過について簡単に述べることにする。

実験方法として、幼児と大人を対象としてフォースプレート上で立ち幅跳びを行なわせ、同時に動作をハイスピードビデオカメラを用いて毎秒200コマで撮影した。分析は、フォースプレートからの力信号をA/D変換し、水平方向と垂直方向に作用した力の変化を求め、動作分析をスーパーインポーズユニット内蔵のパソコンを用いて、身体各部位の角度、速度等を算出するという方法で行なった。

分析の結果、踏切時における力発揮のパターンは、幼児（6歳時）においては垂直方向の力のピークが出現した後に水平方向の力のピークが出現し、これまでの報告と一致する結果が得られた。また踏切時のフォームは、幼児と大人でほぼ共通しており、6歳頃ですでに踏切のフォームが形成されていると考えられた。

一方、踏切後の空中動作については、大人と幼児で踏切後の股関節角度が異なっており、幼児では踏切後

大人ほど上体を反らせていないことが明らかとなった。したがって跳運動においては、6歳頃では踏切のフォームはほぼ完成されているが、踏切後の空中動作にまだ未発達の部分が残っていると考えられる。

次に大人の投動作については、種々のボールを投げたときの動作を16mmハイスピードカメラを用いて毎秒100コマで撮影した。分析の結果、投動作にはそれぞれのボールに応じたフォームがあり、投げるボールによってフォームが変化することがわかった。すなわち、握れる軽いボールの場合は肘や手首をムチのように使って投げ、握れない重いボールの場合は腕を一本の棒のようにして上体のしなりを使って投げるということが明らかとなった。

今回の研究では、上記の分析の成果からいくつかの重要な知見が得られた。まず跳運動については、これまでの研究が踏切までの局面のみを分析し、6歳頃にはフォームが形成されるものとされてきたのに対し、踏切後の空中動作まで分析した本研究によって空中動作にはまだ未発達の部分が残っているという重要な事実が発見されたのである。本研究の結果に基づくことで、実際の指導場面において空中も含めたフォームの形成を指導することが可能になると考えている。また投運動の研究については、投げるボールが変わると投げ方も変える必要があることが分かったので、実際の指導場面や無理な投げ方によって起こる障害予防の点で役立つものと思われる。

今後はこの種の研究をさらに発展させ、現場での指導に役立つような科学的データを提供していきたいと考えている。

# 留 学 雑 感

## “ Impression of Japan ”

外国人留学生 (工学部)

PEREZ ALVAREZ

LUIS EDUARDO

(グアテマラ)



Luis Eduardo Perez Alvarez (Guatemala-Central America) is a graduate student at the Graduate School of the Faculty of Engineering, Electrical Engineering Department. He came to Toyama in April last year. Before coming to Toyama he had

studied the Japanese Language Course (Intensive Course) in Nagoya University (Language Center).

He regards Toyama as a good place for his present studies, he is a Japanese Government Scholarship student.

I came from Guatemala, in Central America, as MOMBUSHO Scholarship student. Only two students from Guatemala can receive the scholarship each year, by this reason I think that for me this is a good opportunity to improve my knowledge about Engineering, and I am trying to do my best.

About my studies, I am graduated from San Carlos University, Faculty of Engineering, School of Mechanical-Electrical Engineering, that is the third university founded by Spanish people in Latin-America, at the same time I was studying Portuguese and English languages, at the Language School of the University.

I came to Japan in October 1987, after arriving in Japan, I studied the Japanese Language at Nagoya University for a period of six months. Then I came to Toyama, now I am studying at the Graduate School of the Faculty of Engineering, Electrical Engineering Department, studying under the guidance of professor Dr. Hiroshi Fujita, that gives me very careful guidance, and also is very kind with me, I truly appreciate his warm kindness.

First I must talk about my experience learning

Japanese Language at Nagoya University, Language Center, this was a good experience, because it provided an opportunity to meet and make a friends with people all over the world. Of course is very difficult to not take in consideration the initial culture shock, because the Japanese culture and Latin-American culture are very different. Study Japanese Language in six months (intensive course) is very hard, and make the mastering in Japanese, I think that for us, is an impossible task, because our language is totally different to the Japanese language, and may be for all of us, this was our first experience learning Kanji, that is the most difficult part, however all of us was studying very hard. In my personal point of view I think that for me was a good experience, and I felt that there some of our professors and Japanese friends provided to us special and individual attention to each person's life.

The motivating force behind my coming to Japan was my high regards for electric and electronic engineering research and technology. I was of course, also very interested in Japan, which has a culture totally different from that my own country, and has achieved such rapid economic development and advanced technology.

I am conducting my research on Power Electronics, that in this time has greatly extended the horizons, and we are at the threshold of a new era. This era is the largely the result of the development of power devices and very powerful microcomputers, that will continue to be a stream of new devices to apply with we cannot imagine; but even with the devices presently known, the challenges and opportunities in power electronics are amazing. The boundaries of our technology have expanded much more rapidly than our progress forward these boundaries.

the dormitory of Toyama University called Foreign Students House, I felt that the dormitory life could provide many opportunities for making friends, like Nagoya University Foreign Students House, unlike an apartment building or a boarding house, of course this dormitory still small, only six rooms, and only me from Latin-America, but any way so anyone would find it easy to make a friends even with students of other faculties.

My first impression of Toyama was that it retains a great deal of natural beauty and traditions. I felt this most upon arriving in Toyama which happened to be in Spring, but any seasons are beautiful, by example the Autumn, when the leaves were changing colors. It was a wonderful to see the individual trees and entire mountains changing colors so clearly. I think that Toyama is a beautiful place, and I know that Toyama Prefecture is a land blessed by nature, where the beauty of the land delights the eyes, the wealth of fish is tempting to the palate, and the clear alpine streams bring life giving moisture to all they touch, I already visited Tateyama Alpen Route, Kurobe Dam, Gokayama, Yatsuo, Tonami and others beautiful places, really I was enjoyed there. After the beautiful Autumn came the Winter, I was brought up in a warm country, I think that the Winter in Toyama is so hard, but some persons said that recently the Winter was not hard. All four seasons are well defined in Toyama, each has its own remarkable beauty. When I have some free time and the weather is good, I often to go to the grass-covered side of Jinzu river, and the Toyama Port, I like to watch the river of Jinzu river, and the Toyama Port, I like to watch the river, the mountains and the sea. I relax on the

lawn and read a book, practice sports, or listen to music, it is a great way to relax, and I like to talk with the persons inside or outside of the university, I find some persons that have interest in talk and learn somethings about my country and Latin-American culture, is also very enjoyable.

I have a good friends that every time are helping me, and understanding me, specially I recognize that Mr. and Mrs. Kobayashi, are my best friends, once a week I am attending Japanese class for reading Kanji of my field of study, in the Kobayashi's family house, and I enjoy with theirs, really I felt that Mr. and Mrs. Kobayashi are part of my family, and generally they take good care of me, I truly appreciate their warm kindness.

At the end I must talk about the language problem. I only had taken than six months of Japanese language course, so the first problem I worried was the language. But now I will say that, based on my experience of one year living here, the language problem is not difficult as I expected. But I hope that in the near future will be better if Toyama University can give Japanese Language Class for foreign students. Of course for foreign students who can speak english, will be an advantage, that most of the professors can understand english, specially in the field of technology and science, and the guidance of the research is more easy. I know that sometimes is very difficult for us, conduct the research only in Japanese, and I think that using Japanese and English will be a better way for improve the communication and mutual understanding, and the conducting of the daily research will be more easy for us.

# 学部だより

## 電子情報工学科の設置について —工学部の学科改組—

工学部事務長 小林 武

### 1. 学科改組と電子情報工学科の設置

科学技術の著しい進歩と発展に伴い、産業界においては先端技術分野の進展とそれに伴う産業構造の変化が急速に進んでいます。このような状況に対し、産業の一層の発展と技術開発を推進するためには、幅広い基礎学力と応用展開能力を身につけた創造性豊かな技術者及び時代の変化に適応して新しい境界領域の技術開発を推進できる研究者が求められています。

最近の科学技術は、メカトロニクス、エレクトロニクス、情報処理、新素材及びバイオテクノロジー等で明らかなように細分化された専門分野の枠を超えて総合化あるいは学際化によって発展しています。このことは従来の小学科のような学科設置形態あるいは講座形態の教育研究組織とはなじまず、更にカリキュラムの点から観ても問題があると思われていました。

そのために、多くの大学特に工学部を中心として先端技術分野の人材養成に必要な教育研究組織の在り方が問われてきました。本工学部においては、既設の7学科及び共通講座を見直し、改組によって新しい学科組織を構想し、その新しい学科を基礎として大学院博士課程の設置に向けて教育研究体制の整備を推進することが肝要であると考えました。そして、長期的展望に立ち見直しの検討を重ねた結果、先ず電気工学科、電子工学科及び共通講座を統合・改組し、更に情報系分野を拡充していわゆる大学科・大講座制による電子情報工学科を設置することとしました。

### 2. 電子情報工学科の教育研究内容

この学科の理念は、工学的基礎に重点を置く観点に立ち、電気、電子及び情報の各分野にわたって学際的な教育研究を行い、急速に発展する先端技術及び情報化に柔軟に対応し、自ら新しい分野を開拓し発展させる能力を有する人材を育成することにあります。

学科には次の5大講座が置かれます。

#### 1) 電気システム工学

電気・機械エネルギー交換工学、パワーエレクトロニクス、電力系統工学、制御工学、電力応用工学、電気回路理論

#### 2) 物性デバイス工学

半導体物性、表面界面物性、光電変換素子、薄膜電子素子、誘電体物性、結晶工学

#### 3) 計算機工学

電気磁気学、電磁波工学、電子回路工学、情報機器、計算機工学、数理解析

#### 4) 基礎情報工学

情報処理、計算機言語、オペレーティングシステム、ヒューマンインタフェース、ソフトウェア工学

#### 5) 知識情報工学

数値処理、パターン情報処理、人工知能、情報通信

### 3. 今後の学科改組など

本工学部では、教育研究組織の在り方を検討するために学部改革検討委員会を設け、昭和59年9月に第1回委員会を開催以来今日に至るまで実に34回の委員会を重ねてきました。その成果を得て平成元年度には電子情報工学科の設置が実現し、平成2年度においては既設の工業化学科、金属工学科、機械工学科、生産機械工学科及び化学工学科の各学科を統合・改組し、新たに機械システム工学科（生産のシステム化）、物質工学科（新素材の開発）、及び化学生物工学科（バイオテクノロジーの確立）の設置を目指します。更に前述したように、この学科改組を基礎として大学院博士課程の設置に向けて教育研究体制の整備を急がねばなりません。技術者の養成の目的は広い視野から考える必要があります。要は、常に科学技術の発展や時代の要請に配慮しつつ自己改革を進めていかねばならないと考えられます。

# 学 生 部 だ よ り

## 就職協定の遵守について

来春卒業予定の皆さんは、将来の進路についていろいろお考えのことと思います。

さて、平成元年度大学及び高等専門学校卒業予定者に係る就職協定期日については、「就職協定協議会」において次のとおり決定されました。

- ① 8月20日 企業等の説明および個別訪問開始
- ② 10月1日 採用内定開始

これらの期日は、皆さんの最終学年の学習にできる限り支障を与えず、また就職機会の均等（公平性）を期するという観点から定められたものです。

皆さんは、この趣旨を十分理解されて個別訪問開始日を遵守されるようお願いします。

## □ 昭和63年度卒業生就職状況

平成元年5月1日現在

学部	項目 学科・課程 性別	卒業生数		就職希望者数		就職者数		就職未定者数		就職率(%)	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人文学部	人文学科	24	60	19	57	18	54	1	3	94.7	94.7
	語学文学科	13	64	12	62	12	53		9	100.0	85.5
	計	37	124	31	119	30	107	1	12	96.8	89.9
教育学部	小学校教員養成課程	31	104	31	101	26	88	5	13	84.0	87.1
	中学校教員養成課程	21	29	18	28	15	23	3	5	83.3	82.1
	養護学校教員養成課程	4	16	3	14	3	13		1	100.0	92.9
	幼稚園教員養成課程		27		27		24		3		88.9
	計	56	176	52	170	44	148	8	22	84.6	87.1
経済学部	経済学科	100	11	95	11	95	11			100.0	100.0
	経営学科	83	27	78	26	78	25		1	100.0	96.0
	経営法学科	48	8	47	8	47	8			100.0	100.0
	計	231	46	220	45	220	44		1	100.0	98.7
理学部	数学科	33	13	28	11	26	11	2		92.9	100.0
	物理学科	33	4	22	4	22	4			100.0	100.0
	化学科	23	12	16	12	16	11		1	100.0	91.7
	生物学科	23	7	14	3	14	3			100.0	100.0
	地球科学科	19	5	17	4	17	4			100.0	100.0
	計	131	41	97	34	95	33	2	1	97.9	97.1
工学部	電気工学科	48		38		38				100.0	
	工業化学科	29	7	18	6	18	6			100.0	100.0
	金属工学科	33		20		20				100.0	
	機械工学科	60		53		53				100.0	
	生産機械工学科	33		29		29				100.0	
	化学工学科	29	2	17	2	17	2			100.0	100.0
	電子工学科	32		21		20		1		95.2	
計	264	9	196	8	195	8	1		99.5	100.0	
合計	719	396	596	376	584	340	12	36	98.0	90.4	



□ 昭和63年度卒業生産業別就職状況

平成元年5月1日現在

産業別		学部					合計	産業別		学部					合計	
		人文学部	教育学部	経済学部	理学部	工学部				人文学部	教育学部	経済学部	理学部	工学部		
農・林・漁業							不動産業		2	2				4		
鉱業							運輸通信業	運輸業	4		9	1		14		
建設業	5	2	14	1	5	27		通信業			3		3	6		
製造業	食料品・たばこ製造業	1		6	6	1		14	計	4		12	1	3	20	
	繊維工業				2	2	4	電気・ガス・水道業			5		6	11		
	衣服・その他の繊維製品							サービス業	医療保健業							
	出版・印刷関連産業		3	3		3	9		法務							
	化学工業	1		2	10	11	24		宗教							
	石油製品・石炭製品								非営利的団体		3			3		
	鉄鋼業				1	5	6		情報処理	22	10	43	30	16	121	
	非鉄金属製造業		1	1		3	5		その他のサービス業	25	9	13	1		48	
	金属製品製造業			5	2	11	18		計	47	22	56	31	16	172	
	一般機械器具		1	3	7	17	28		教育	20	135	3	33	2	193	
	電気機械器具	5	3	9	6	60	83		公務	国家事務	3	4	7	5	3	22
	輸送用機械器具			3		27	30			地方事務	13	9	26	3		51
	精密機械器具				5	3	8	計		16	13	33	8	3	73	
	その他の製造業	3		12	8	13	36	上記以外のもの				3		3		
	計	10	8	44	47	156	265	合計	137	192	264	128	203	924		
卸小売	卸売業	7	1	18		10	36	規模別就職先	大企業業 (従業員数300人以上)	62	20	181	67	162	492	
	小売業	19	6	20		2	47		中企業業 (従業員数30~299人)	32	10	40	16	33	131	
計	26	7	38		12	83	小企業業 (従業員数29人以下)		6	11	7	1	2	27		
金融保険業	銀行信託業			23	1		24		企業以外	37	151	36	44	6	274	
	証券業・商品取引業	6	3	11			20									
	保険業			14	2		16									
計	1		11	1		13										
計	7	3	59	4		73										

## 第41回北陸地区国立大学体育大会

- |       |  |             |  |
|-------|--|-------------|--|
| 1. 主催 | 北陸地区国立大学体育連盟，金沢大学  | 4. 参加大学     | 富山大学，富山医科薬科大学，高岡短期大学，福井大学，福井医科大学，金沢大学  |
| 2. 後援 | 石川県，金沢市，石川県教育委員会，金沢市教育委員会，石川県体育協会  | 5. 参加資格     | 各大学において，資格承認を得た学生とする。  |
| 3. 期日 | 平成元年7月9日（日）<br>ただし<br>準硬式野球 7月8日・9日<br>庭球<br>6月18日，7月8日・9日<br>サッカー 6月25日，7月2日<br>ラグビー・フットボール<br>6月18日・25日，7月2日<br>バドミントン 7月7日・8日・9日<br>剣道 6月25日<br>ヨット 7月8日・9日<br>弓道 7月8日・9日<br>創作舞踊 7月8日<br>少林寺拳法 7月8日<br>合気道 7月8日<br>アメリカン・フットボール<br>6月25日 | 6. 競技種目及び会場 | 別紙（実施細目）のとおり   |
|       |  | 7. 開会式      | 7月9日（日）午前9時から（石川県体育館）<br>参加者は8時30分までに集合すること。                                 |
|       |  | 8. 閉会式及び表彰  | 各種目別に各会場で行う。   |
|       |  | 9. 大会本部     | 金沢大学学生部学生課<br>金沢市丸の内1の1<br>電話（0762）62-4281（代表）<br>内線281<br>（0762）62-1615（直通） |

### 第41回北陸地区国立大学体育大会実施細目

種目	期日	開始時間	競技会場	出場選手数	競技方法及び小種目
陸上競技	男・女 7月9日	10:00	石川県西部緑地公園 陸上競技場	(1) 1種目2名以内（リレーを除く）ただし，1名のオープン参加を認める。 (2) 1人の出場種目は3種目以内とする。（リレーを除く）	男子（トラック） 100m, 200m, 400m, 800m, 1500m, 5000m, 110m H, 400m H, 3000m S C, 400m R, 1600m R (フィールド) 走幅跳, 三段跳, 走高跳, 棒高跳, 円盤投, 砲丸投, 槍投, ハンマー投 女子（トラック） 100m, 200m, 400m, 800m, 100m H, 400m R (フィールド) 走幅跳, 走高跳, 円盤投, 砲丸投, 槍投
野球	男 7月9日 (雨天の場合 10日に延期)	9:00	野々市町民球場	25名以内	リーグ戦
庭球	男・女 6月18日 7月8日 9日 (雨天の場合 10日まで順延)	9:00 9:00 開会式 終了後	富山医科薬科大学 テニスコート 石川県兼六園コート	男子15名以内 女子7名以内	団体（トーナメント戦）男子4複7単 団体（リーグ戦）女子2複3単
軟式庭球	" 7月9日 (雨天の場合 10日に延期)	9:00	金沢市 東金沢テニスコート	男子30名以内 女子20名以内	団体（点取りリーグ戦）男子5組9ゲーム，女子3組9ゲーム 個人（トーナメント戦）男子15組以内9ゲーム， 女子10組以内9ゲーム
卓球	" 7月9日	開会式 終了後	金沢大学 大体育館・小体育館	男子20名以内 女子12名以内	団体（リーグ戦）男子4複7単，女子2複5単 個人（トーナメント・シングルスのみ）男子20名以内， 女子12名以内
バドミントン	" 7月7日 7月8日 7月9日	13:00 9:00 9:00	金沢市 浅野川市民体育館	男子16名以内 女子10名以内	団体（点取りリーグ）男子3複4単，女子2複3単 個人（トーナメント）シングルス男子12名以内，女子10名以内 ダブルス男子6組以内，女子5組以内

種 目	期 日	開始時間	競 技 会 場	出場選手数	競 技 方 法 及 び 小 種 目
バレーボール	〃	7月9日	9:00	金沢大学小立野体育館	男女共12名以内 トーナメント戦
サッカー	男	6月25日 7月2日	10:00 10:00	金沢大学城内グラウンド	20名以内 トーナメント戦
ラグビー フットボール	〃	6月18日 6月25日 7月2日	11:00 15:00 14:00	金沢大学城内グラウンド 金沢大学城内グラウンド 石川県サッカー ラグビー競技場	25名以内 トーナメント戦 3位決定戦(35-5-35)
剣 道	男・女	6月25日	9:00	金沢大学大体育館	男子25名以内 女子12名以内 団体(点取りリーグ)男子13名以内(登録15名以内) 女子5名以内(登録7名以内) 個人(トーナメント)男子10名以内, 女子5名以内
柔 道	男	7月9日	開会式 終了後	金沢大学小体育館	17名以内 団体(点取りトーナメント)3位決定戦 個人(トーナメント)4名以内
バスケット ボ ール	男・女	7月9日	開会式 終了後	石川県体育館	男女共20名以内 トーナメント戦
水 泳	男・女	7月9日	9:00	松任総合運動公園 プール	(1) 1種目3名 以内 (2) 1人の出場 種目は3種目 以内 (リレーを除く) 男子 自由形 50m, 100m, 200m, 400m, 800m 背 泳 100m, 200m 平 泳 100m, 200m バタフライ 100m, 200m メドレーリレー 400m リレー 200m, 800m 個人メドレー 200m, 400m 女子 自由形 50m, 100m, 200m, 400m 背 泳 100m, 200m 平 泳 100m, 200m バタフライ 50m, 100m メドレーリレー 400m リレー 200m, 400m 個人メドレー 200m
ヨ ッ ト	〃	7月8・9日	9:00	七尾湾	20名以内 総合と種目別(スナイプ, 470級)スナイプ級2艇制, 470級2艇制
準硬式野球	男	7月8日 7月9日 (雨天の場合 10日まで順延)	13:00 9:00	金沢大学野球場	25名以内 トーナメント戦 3位決定戦
ハンドボール	男・女	7月9日	10:00	金沢美術工芸大学 体育館	15名以内 男子 トーナメント戦 3位決定戦 女子 富山大学と金沢大学のエキシビジョン
空 手 道	男	7月9日	10:00	金沢市総合体育館 第2競技場	20名以内 団体 自由組手(5組) リーグ戦 各試合2分3本勝負 個人 自由組手トーナメント戦 各校4名以内2分3本勝負 (引き分けの時 2分延長後判定)
弓 道	男・女	7月8日 7月9日	9:00 9:00	石川県立武道館 弓道場	男子14名以内 女子6名以内 団体 男子8名(1人20射 計160射) 女子4名(1人20射 計80射)四ツ矢5回 個人 団体戦出場者及び男女8名(20射中の中数の多い者)
体 操	〃	7月9日	10:00	金沢市総合体育館 第1競技場	男子20名以内 女子10名以内 男子 床運動・鞍馬・平行棒・吊輪・跳馬・鉄棒 女子 床運動・段違平行棒・平均台・跳馬
自 動 車	〃	7月9日	7:00	東部自動車学校	団体 各種目2名 個人各種目出場者 2名以内 フィギアレース (1) 軽四輪(550cc以下) (2) 小型トラック(ナンバーキャブオーバータイプ) (3) 小型乗用車 (4) 普通乗用車
創作舞踊	〃	7月8日	14:00	石川県教育会館	公開演技
少林寺拳法	〃	7月8日	13:00	金沢大学大体育館	公開演武(団体演武・組演武・個人乱捕リーグ戦)
合 気 道	〃	7月8日	14:30	金沢大学小体育館	公開演武(組演武)
アメリカン フットボール	男	6月25日	14:00	福井大学 グラウンド	金沢大学と福井大学のエキシビジョン

## 保健管理センターだより

助 教 授 高 尾 テルノ  
(カウンセラー)

### ◆学生相談室より

最近の学生は ・昔ほど悩まなくなった・講義に出席する学生が増えた・三無主義あるいは四無主義（無気力、無関心、無責任、無感動）の学生が減少し、意欲的な学生が増えてきた といわれている。

また ・反抗しないおとなしい学生・喜怒哀楽の怒の抜けた（怒りの忘れた）学生・要領のいい学生・物事をよく考えない学生が増加している ともいわれ、学生像の多様化も甚だしく「最近の学生は」云々と一言でまとめること自体が無理になってきているように思われる。

学生相談室への昨年、一昨年の来談者数は、あまり変化はないが、その内容が深刻化してきている。中には、30代、40代で悩めばと思う内容もあり、逆に、こんな事だと一笑に付したい様な内容もあるが彼等にとっては真剣そのものである。

昭和63年度の富大生の生活意識調査の結果（1,475名）から2～3について記してみよう。

#### ア 悩みの有無

①悩みが全くない（27.9%） ②多少悩んでいる（61.5%） ③ひどく悩んでいる（10.2%） ④その他（0.4%）となって約72%の学生が、何らかの形で悩みを持っている。青春時代は、迷い、悩みをもつのは自然の姿であり、悩むことにより成長するのである。しかし全く悩みのない約28%の学生に、かえって問題があるのではなかろうか。「悩む必然性もちながら悩まない青年がいる」という事実から、悩まない青年を①無自覚型②逃避型③価値否定型の3つのタイプがあると考えられる。

#### イ 悩みの内容

①成績関係（24.7%）②進学・就職（将来について）（13.2%）③友人関係（10.7%）④自分の性格（10.6%）⑤恋愛問題（8.7%）が上位を占めている。また2～

3年前まで影を潜めていた経済的問題が浮上してきたことが注目される。

#### ウ 性格

日常生活における習慣・行動を通しての性格については、全般的にやや消極的であり、内向的面をもっている。

①注意を集中しようとしても、気が散ってしまいがちである（67%）②たびたび気分の浮き沈みがある（60%）③人と話している最中でも、ふっと物思いにふけることがある（54%）④はっきりした理由もないのに楽しくなったり憂うつになったりする（47%）⑤人との交際が出来なくなるのは、とてもやりきれない（82%）など半健康状態の学生が多いのではないかと危惧される。

高校時代の勉強本位の生活で自我の発達や社会性を培うことに欠けている学生が増えている現在では、これまでの生き方を見直し、再出発していくために1・2年の廻り道があってもよいのではなかろうか。

人間、他人の敷いたレールに乗っかるのではなく、人との出会い、人との語らいを大切に、自分を見つめ、事物をよく見、人をも見そして社会を見、自然の美しさ偉容さに感動しながら螺旋状に成長し、自分で目標へのレールを敷いてほしいものである。

何か困ったり、迷ったり、疑問を感じたりあるいは情報を得たいと思った時には遠慮なく相談室のドアをノックしてください。

### ◆健康の集い

センターでは、学生および教職員の方々の健康についての関心を深め、知識の向上を目的として「健康の集い」を実施しています。今年度の実施予定は次表の通りです。その都度、各個所に掲示しますので関心のある方は気軽に参加してください。

平成元年度実施予定表

月日	テ ー マ	講 師 等	備 考
6・14	スポーツと外傷	市堰英之先生 (校医・整形外科医) (スポーツドクター)	・応急処置と予防 ・人工呼吸法 ・テーピングの巻き方
10・	未 定	布村忠弘教養部助教授 (循環器系内科医) (スポーツドクター)	
11・	余暇と活力	稲垣保彦教授 (センター所長)	
2・	友と大いに語り考えよう！	高尾テルノ 助教授 (カウンセラー)	エンカウンター・グループ

◆健康増進合宿セミナー（第7回北陸地区国立5大学合同）

大自然の中で、日頃思っていること感じていることを話し合い、またスキー実習を通して新しい対人関係を得、新しい自己を発見するための合宿です。

平成2年3月上旬に2泊3日の日程で、立山山麓ゴンドラスキー場を予定しています。詳細な日程等は決定次第掲示します。

◆レク・セラピー室の利用について

レクリエーション・セラピー室には、体力測定器具・健康器具（トレッドミル、エルゴメーター、ツイストマシン、ローイングマシンetc）、囲碁、将棋、オセロ、トランプ等の娯楽遊具そして健康に関する雑誌や小冊子、テレビ、ビデオテープ等が備えてあります。ゲームや語らいを通して、また汗を流しながら、人と人との輪を広めていく場所ですので、1人であるいは友人を誘って気軽に利用してください。



## キャンパス樹木誌（7）

### トチノキ (Aesculus turbinata Blume) トチノキ科

トチノキは北海道南部から九州まで全国的に分布する落葉広樹林である。とくに北陸から東北地方にかけて多い。涼しい気候と肥沃な湿った土地を好み、ふつう沢沿いや溪流沿いに生育する。成長は比較的良く、高さ20m、胸高直径2mに達する大木にもなる。葉は複葉で、7枚の小葉が天狗の羽うちわのような形に配列する。

春の終わりごろ、枝の先端にふさ状の花序が伸び、白い小花が密に咲く。秋に直径5cmほどの黄褐色の果実を付けるが、熟すと外側の皮が割れて大きなクリほどの種子が落ちる。この種子はサポニンをふくみ、そのままでは苦渋味があって食べられないが、細かく砕いて水とアルカリでアクを抜くと良質のトチ粉ができる。この粉をモチ米と一緒に炊いてつき混ぜるとトチ餅になる。かってトチノキは凶作や飢きんのさいの救荒食物として全国的に大切にされた。また野生動物にとっても重要な食料である。花からは良質の蜜がとれる。材は良質で木目が美しいため家具材、彫刻材、漆器木地などとして用いられる。

トチノキは樹形が美しく、緑陰樹として優れているが、湿潤で肥沃かつ通気性排水性の良い土壌を要求す

るなど生育条件が難しいため、栽培が難しい。

ヨーロッパ産のセイヨウトチノキ(A. hippocastanum)はマロニエとも呼ばれ、風格ある樹形とそれが作る木陰が好まれ、公園樹や街路樹として、ヨーロッパだけでなく今では温帯地方に広く植栽されている。

本学キャンパスでは理学部2号館裏中庭に1本植えられており、秋には実が落ちる。

教養部教授 小島 覚



## ◀◀◀◀ 学園ニュース編集委員 ▶▶▶▶

学生部長	瀧	澤	弘
人文学部	河	村	貞枝
〃	山	口	幸祐
教育学部	呉	羽	長
〃	原	田	嘉昭
経済学部	山	崎	清
〃	相	澤	吉晴

理学部	松	本	賢一
〃	広	岡	公夫
工学部	島	崎	長一郎
〃	杉	本	益規
教養部	高	安	和子
〃	山	本	孝一